

[成果速報]

さつまいも苗安定生産技術（地温 30℃の確保）

【背景】

近年、焼き芋やスイーツとして需要が高いさつまいもが注目されており、県内においても水田を中心にさつまいも栽培が増加しています。これまで、苗は主に県外から購入していましたが、**サツマイモ基腐病の発生により県外産地からの入手が困難となり、県内で苗を安定生産する技術の確立が求められています。**

そこで、苗安定生産技術確立に向け、前年にキュアリング*した「べにはるか」の種芋（300～400g/個）をプランターに並べ十分にかん水後、**20℃、25℃、30℃に設定した人工気象室に入庫し、さつまいも種芋の伏せ込み温度の違いが苗生産に及ぼす影響を調査しました。**

※ 気温 30～35℃、湿度 90%程度の条件下に4～7日間静置することで、さつまいもの傷口にコルク層を形成させ雑菌の侵入を防ぎ、貯蔵性を向上させる処理。本試験では、気温 35℃、湿度 85%の条件下に5日間静置しました。

※ 本試験ではプランターを用いたため、気温と地温はほぼ同様の値で推移しました。

【結果】

各設定温度において萌芽が揃うまでの所要日数は表1のとおりで、**30℃設定で13日と最も早く、20℃設定で42日と最も遅くなりました。**一方で、萌芽が揃うまでの積算温度は30℃設定では390℃・日に対し、20℃設定では840℃・日と、差が大きくなったことから、**一定以上の温度が有効積算温度となる可能性**が考えられました。

仮に、**15℃を超える気温差を有効と仮定した場合の有効積算気温**を計算すると、表2のとおり、**200℃・日程度の地温が萌芽揃いに必要な有効積算温度**であると考えられました。

【今後の試験内容】

今回の試験では人工気象室を用いて温度を一定にした条件で実施しましたが、現在は生産現場で活用しやすい技術の確立に向け、パイプハウスを用いた採苗試験に取り組んでいます。ハウス内への小トンネルの設置や透明マルチの活用により気温・地温を確保し、ハウス内気温と地温の関係、萌芽までの所要日数等について調査しています。

表1 萌芽揃い及び積算温度

温度設定	伏せ込み開始日	萌芽揃い*1	所要日数	積算温度	採苗開始日*2
20℃		6月20日	42日	840℃・日	6月29日
25℃	5月9日	5月30日	21日	525℃・日	6月9日
30℃		5月22日	13日	390℃・日	6月2日

※1 各区60%以上の芋から萌芽した日

※2 各区60%以上の芋の苗が9節に達し、採苗可能になった日

表2 15℃を超える気温差を有効と仮定した場合の有効積算気温

温度設定	気温差	萌芽揃いまでの 所要日数	有効積算気温（仮）
20℃	5℃	42日	210℃・日
25℃	10℃	21日	210℃・日
30℃	15℃	13日	195℃・日

（野菜研究室 鈴木 惟史）